MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

News Letter 中部大学民族資料博物館

vol.05
November 2013

トピック『学園探訪』シリーズを開始します

作品を眺める大西学園長

民族資料博物館のアドヴァイザーを務めていただいている学園長に、構内の参考作品をめぐって交流を育まれてきた思い出をおうかがいしていきたいと考えています。

ふだんなにげなく見かけているさまざまな作品たち。これらは、若人が集う学びと癒しの環境作りのためにと、開学当初から多くの人々の願いが込められた歴史のなかで計画を立て設置されてきたことをご存知でしょうか。

今後は本紙のトピックシリーズのなかで、博物館のできる以前にさかのぼり、われらの学び舎が現在の姿に整備されてきた様子を、キャンパス内に徐々に添えられてきたものに触れつつ、ご紹介してまいります。

第１回は「アドリアの実り」についてお話をいただきます。

作者の川原先生と私が長きにわたって親交を深めたことをきっかけに、いくつかの作品を提供いただきました。

この『アドリアの実り』もその一つです。像を設置する予定となったリサーチセンターを、作者自らが東京から直接見に来てくださり、当時身近に置いて大切にされていたこの作品を選出してくれました。

私も川原先生のアトリエに幾度も訪問する機会があり、いつも『アドリアの実り』を前に立ち止まってしまったものです。この像は、見る者を深く包み込む情愛を放ち、その場全体を至福の空間に変えてしまう不思議な力があるように感じるのです。本学に迎えることに決まったときには大変感激しました。

現在のリサーチセンターの１階は、よく知られているとおり吹き抜けの空間になっており、さらに北側にも設けた細長いガラス窓を通じて自然の移ろいを眺め感じることができる開放的な場所です。彫像は、ちょうどこの窓に向かって腕をのびやかに挙げ、軽やかに空中に浮かんでいるようにもみえます。まるで豊穣の源といえる大海のなかでたゆたう女神が、この緑豊かなキャンパスに降り立ち、多くの若者たちの未来に向けて静かに微笑んでいるかのようです。

次回、リサーチセンターを訪れる際には、彫像の手のひらをのぞいてみてください。小さな［実り］の贈り物が載っています。ここに立ち寄るたびに私は、みなさんが学生生活を通じて、たとえちいさな芽吹きであろうと、何か光るものを見出し、それを大切に育みながら、次代に向かって歩んでいってほしいという願いを重ねて眺めています。

参考作品 『アドリアの実り』　制作：川原竜三郎、ブロンズ、2010～2011年（中部大学蔵）

川原竜三郎（1940～2012）は、ローマ滞在中に戦後のイタリア彫刻を代表するペリクレ・ファッツィーニ（1913～1987）に師事するなど、南欧の息吹を感じさせる彫刻家です。

索引（いんさく）

◇巻頭
トピック『学園探訪』シリーズを開始します
第１回『アドリアの実り』 1

2013春季・夏季行事報告

◇2013春季企画展示
5月『海のシルクロードと絨毯展』 2
民族資料博物館副館長　宇治谷　恵

◇特別講座１
5月『古典絵画講座１』３年目がスタート
民族資料博物館　原田千夏子

◇2013春季連続講演
5月 第１回『シルクロードとアフガニスタン』 3
民族資料博物館副館長　宇治谷　恵
6月 第２回『祇園祭と海のシルクロード』 4
民族資料博物館副館長　宇治谷　恵
8月 第３回『縄文時代からのファッション』
民族資料博物館副館長　宇治谷　恵

◇2013夏季常設コレクション展示
7月『仮面と物語』 5
民族資料博物館　原田千夏子

◇協力行事
8月 国際文化学科オープンキャンパス分会場
『仮面を通してみる世界、仮面を通してみる私
―世界各国の仮面と民族衣装を試着して、
携帯で写真撮影しよう！―』
国際文化学科准教授　伊藤裕子
“あつまれ！わんぱく隊” 6
幼児教育学科准教授　釆睪真澄
『チャレンジドチルドレンのための
小さな冒険プログラム2013』報告 7
作業療法学科 准教授　中路純子

◇トピック
地域催事へ学生が参加～古の染織材料（復元）をまとい舞台に
2013下半期（秋季冬季）行事案内 8

5月

■ 2013 春季企画展示

「海のシルクロードと絨毯展」

―波濤を越えて、伝来した美しい手織り絨毯に秘められた知られざる歴史を巡る― について

‖ 期間 ‖ 2013年5月29日（水）～ 8月1日（木）
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館 多目的室、1F エントランス

春季企画展示の案内チラシ

中部大学民族資料博物館の多目的室では、学内外の民族資料に関する研究の成果を特定のテーマをもとに総合的及び体系的に紹介する企画展示を年に数回開催している。平成25年（2013年）春に開催の企画展示「海のシルクロードと絨毯」に展示された絨毯は、正倉院の御物や京都の祇園祭の山鉾（山車）を飾る懸装品にも見られるものであり、大航海時代の幕開けとともに陸や海のシルクロードを通じてわが国と海外との交流を物語る貴重な資料でもある。この絨毯が、わが国で織りはじめられたのは17世紀末に九州の肥前鍋島が最初であり、その後、近畿の堺や赤穂でも織り始められた。赤穂緞通（絨毯）は嘉永2年（1849年）に中国の絨毯に魅せられた「小島なか」という一婦人によって織り始められ、近畿地方を中心に各地に供給されていったが、現在は伝統工芸としてわずかに生産されるのみであるが、地域振興のひとつとして、赤穂毯通を地域の産品として発展させようとの動きもある。この展示では、海のシルクロードと絨毯を第一のテーマとして、南蛮貿易と祇園祭りの絨毯、欧州の絵画に見られる絨毯を紹介した。第二のテーマとして、赤穂緞通とペルシャを中心とするシルクロードの絨毯を比較することで、織の技法や染色がどのように影響を受けたかを紹介することとした。大航海時代の幕開けとともに伝来した、アラビアやペルシャの手織り絨毯の技術や文様が、どのようなルートを辿って、わが国にもたらされ、受け入れられ、その後、日本の風土にあう敷物として変容してきたのかを立体的に親しみやすく展示した。

春季展示の風景

展示を開催するにあたり、祇園祭り山鉾連合会理事長吉田孝次郎氏、赤穂氏緞通小屋みさき・井関京子氏、はじめ多くの方々のご協力を得ましたことに深く感謝する。（宇治谷）

5月

■ 特別講座 1

「古典絵画講座１」３年目がスタート

‖ 期間 ‖ 2013年5月15日～ 7月31日　水曜日・午後／全12回
‖ 教室 ‖ 10号館6階　106Ｊゼミ室

講座の様子

約半年間にわたる日本画の実技制作の一般対象の講座が今年も始まった。

開館初年度から3年目、これまで絹絵、板絵の制作を通じて古典絵画を学ぶ内容だったところに、今年は新たに日本画作品の制作も含めることになり、一つの講座のなかで、受講生が、基底材の違う表現方法の絵画作品を自由に選択して制作できるようにした。指導講師は従来と同じく日本美術院の下川先生にお願いしているが、講師は受講生各自の使用材料や進度に応じて対応していただくため、特に定員を限定してきめ細かい指導が行き届くように考えた。今年度は、下半期に講座２と特別講座を通じた素材研究の経過を調査報告として、秋季企画展示を行う予定である。（原田）

5月
|
8月

■ 2013春季連続講演

海のシルクロード

春季連続講演チラシ

■ 連続講演１｜５月１５日(水) 15：30～｜中部大学リサーチセンター　大会議室

講師：畑中幸子 氏（中部大学 名誉教授）　司会：和﨑春日（民族資料博物館 館長）

「シルクロードとアフガニスタン」―近くて遥かなる国、アフガニスタン

畑中先生は著名な人類学者であるとともに、ニューギニアをはじめとするオセアニア地域やアフガニスタンをはじめとするシルクロード地域、そして欧州のリトアニアまで幅広い地域の社会学者でもある。そして、ご自身の研究テーマを実証するためには、寸暇を惜しむことなく、フィールドで資料収集する現役のフィールドワーカーなのである。

講演会開催の目的は、畑中先生の学問の系譜を伺うとともに、女性人類学者ならではの視点でシルクロード地域の暮らしを紹介していただくとともに、後に続く、われわれにも学問とは何か、あるいは民族資料博物館とは何かを示唆していただくことを狙いとした。

講演の様子

講演では、先生の研究とは何か、仕事とは何かについて、フィールドにおけるNPOやNGO活動と研究者の関わりを事例をあげつつ紹介された。

次に、女性の視点から見た現地の「女子学生」を中心にアフガニスタンの首都カブールの生活や社会について紹介された。そして、最後に「文化財修復」にともなうわが国の文化支援のあり方まで言及されたのである。フィールドワーカーとしての生の情報や見識に接することで、改めて、畑中先生の知識や経験をすこしでも当館の展示や資料収集および博物館活動に生かしていきたいと思ったのである。

講演後の質疑応答では、先生の戦争体験を通して現代の日本の社会や若者に対する提言もいただき、改めてわれわれがどう社会や歴史と対峙するかを考えるよい機会ともなった。

講演会場は多くの参加者で熱気に溢れていた。この講演会を実施した成果は、将来、かならず民族資料博物館の展示や活動に生かされるであろう。（宇治谷）

■ 連続講演２｜６月５日(水) 15： 30 ～｜中部大学リサーチセンター　大会議室

講師：吉田孝次郎 氏（公益財団法人 祇園祭山鉾連合会理事長）　司会：宇治谷　恵（民族資料博物館 副館長）

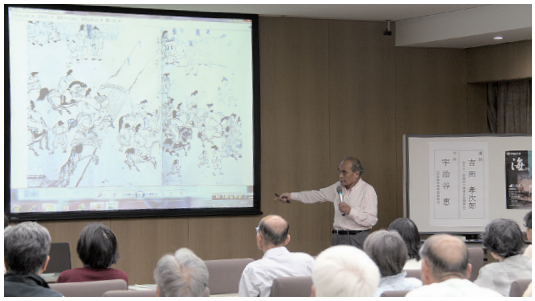
「祇園祭と海のシルクロード」

祇園祭山鉾連合会理事長吉田孝次郎氏よって、民族資料博物館多目的室で公開されている企画展の関連事業として講演会が開催された。

吉田氏は京都・祇園祭山鉾連合会の理事長として祭の責任者をされているとともに、祇園祭研究だけでなく京都の町屋における歴史や文化についての第一人者の研究者でもある。吉田氏は、講演の最初で、自分は先生ではなく祭の一責任者であると紹介されたのである。そのように、祇園祭りの準備等でご多忙のなか、上記のようなテーマで様々な視点からのお話を聴くことができたことは本当に貴重な講演会であった。

お話の内容は、まず始めに、吉田氏のお住まいの京都・新町における町衆や商売人の力について、次に、「動く美術館」と呼ばれる山鉾の起源や歴史の紹介があった。特に、祇園御霊会の意味については、芸能、信仰、都市計画、悪霊退散など多様の視点での吉田氏のお話は改めて祇園祭がわが国の町衆文化の基層部分を形成しており、その影響はこの地方の名古屋や犬山の祭りにも関連していることに言及された。

最後に、山鉾の主役である絨毯の文様や図柄からアラビア、トルコ、モンゴルなどの関連性を紹介することで、祇園祭がシルクロードを経由して遠く欧州から影響を受けていることに展開された。特に染織技法についての課題は興味深い内容であった。講演終了後には展示室に移動してギャラリートークも開催することができ、吉田氏のシルクロード研究に対する造詣や熱意を身近で感じることもできた。（宇治谷）



講演の様子

■ 連続講演３｜８月３日(土) 13： 30 ～｜文化フォーラム春日井

講師：小山修三 氏（国立民族学博物館 名誉教授）

「縄文時代からのファッション」

小山氏は縄文時代に関する研究やオーストラリア・アボリジニ研究の第一人者であり、特に、青森県の縄文遺跡「三内丸山遺跡」の発掘から保存・公開まで中心的存在であって、関連図書も多数執筆されている。前職の大阪・吹田市立博物館長時代には市民参加型の展示会を積極的におこない、これからの博物館のあり方について、新しいアイデアを提示するだけでなく、それを実現するために様々な活動をされることでも知られている。

講演会は、春日井市制70周年市民協業事業「古の技を現代に伝える～春日井の彩り」の一部として、春日井市の市民団体である「悠遊会」はじめ複数の関連団体との共催でおこなった。

講演内容は、アメリカ北西海岸インディアンやオーストラリア・アボリジニ、そして縄文時代における装飾品や土器の特徴や文様を紹介することで、女性のファッションがどのように変容してきたかを紹介された。特に、髪型や化粧の変遷を通してみる、男女の機能分担や役割まで大きな話題を展開されることは、人類学や考古学の楽しみ方を考えるうえでも興味ある内容であった。講演後には、この講演内容をより立体的に展開するため、「縄文から近代」と称した「動く衣の変遷ショー」が市民や学生による参加で開催された。

講演会場はギャラリーを埋め尽くすほどの多くの参加者で熱気に溢れていた。このようなワークショップ型の事業こそが、博物館でしか出来ない講演会ではないかと再認識させられた。

最後に、講演会及びショーを共催として関ることができたのも「悠遊会」の方々の日ごろの活動の賜物であり、改めて感謝するしだいである。

（宇治谷）

講演の様子

7月

■ 2013 夏季常設コレクション展示

「仮面と物語」

‖ 期間 ‖ 2013年7月9日（火）～ 8月6日（火）
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館 常設展示特設コーナー

セクション1
「生命の源～祖先への祈り」の展示風景

今年の夏のテーマ展示は、収蔵資料のうち各地域の仮面をとりあげ、その特徴を主に3つの分類によって解説パネルや参考図、写真を用いて紹介した。

仮面は、各国でさまざまな祭礼に用いられ、それぞれの国の信仰や歴史を受容してきた民族の姿を表している。

一つめは、祖先の霊魂や目に見えない生命力を象徴するため、2つめは、広大な宇宙に人間を守護し存在する神々の世界を示す演劇で表すため、3つめは、他民族との融合によって悲劇的な歴史を受入れながら強く逞しく生き続ける生活を風刺した民話を祭りで表すため、などである。また一方で大きく概観すると、仮面は民族という共同体の絆を強める祭りにおいて、過去、現在、未来を包括する時空を超越した存在性、神や英雄、精霊たちを再現するための演出の道具であったことがわかり、つまり人間の普遍的な表現意欲に関わるかたちといえるのだろう。こうした特徴について、次に、児童から中学生、高校生、大学生へと解説する場合に、どのように工夫して教材を作成していくか、今後の課題である。（原田）

夏季展示案内チラシ

セクション2
「神・人・動物～アジアの仮面劇」の展示風景

セクション3
「歴史と祭り～民族の記憶の再現」の展示風景

8月

■ 協力行事

オープンキャンパス

■ 国際文化学科オープンキャンパス分会場

‖ 期間 ‖ 2013年7月6日（土）・8月4日（日）～ 6日（火）午後
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館『民族衣装と楽器』特設コーナー、夏季企画展示コーナー

「仮面を通してみる世界、仮面を通してみる私
—世界各国の仮面と民族衣装を試着して、携帯で写真撮影しよう！—」

伊藤裕子（国際関係学部 国際文化学科 准教授）

仮面とは何であろう。身体の内の顔だけ、身体を部分的に覆うことによって、身体全体が、またはその存在そのものが「変身する」といった小道具であり、民間伝承、民話、演劇、カーニヴァル、儀式、はたまた仮装舞踏会などの社交や子供のおもちゃにいたるまで、様々な場面で登場する。変身は、通常の秩序の世界に対抗して、無秩序、混沌をもたらしうる祝祭空間や

民族衣装を試着した高校生

民族楽器を奏でる高校生
（写真提供：村上哲也 氏）

逆さま世界をもたらす。そうした混沌のプロセスを経て、仮面を取り除いた後の現実世界は、さらに再生へと向かう。

国際関係学部の7月、8月のオープン・キャンパスでは、中部大学民俗資料博物館の協力を得て、仮面展を分会場とした。訪れた高校生方には、仮面や民族衣装を実際に試着してもらい、民族楽器を奏でて、各民族に成りすました気分と、民族特有の音楽的雰囲気を味わってもらった。本民族資料博物館の最大の特色は、民族的工芸品や資料の多くが、ガラス張りのケースに収納されることなく、実際に触れることができることだ。高校生に、これほどまで身近に、世界各国の文物を感じられる機会を提供できる本博物館は、館内空間に訪れた者たちを、ある種の「祝祭空間」へと参入させるのだ。

高校生たちが仮面を被ったところを、また民族衣装を試着したところを、友達が見たら、どう感じたであろう。彼らはすでに、日常の現実世界から離れ、他文化の主体となりすまし、周囲を驚かせるほどの、非現実性をおどけながらも演じているのだ。携帯で撮ってもらった写真を見て、化けた本人も、仮面や民族衣装を被った自分とは何か、制服などとはどう違うのか、自らに問うてもらいたい。こうした疑似他文化体験が、高校生たちにとって、本博物館を後にして現実世界に戻った時、他文化に対する理解を深め、日頃の生活を“regenerate”（再生・刷新する）する契機となることを願う。

博物館職員の方々には、様々なご協力をいただき、厚くお礼を申し上げたい。（伊藤）

■ 現代教育学部｜8月4日(日) 午後｜

「あつまれ！“わんぱく隊”」夏季行事　報告

講師：采睪真澄（現代教育学部 幼児教育学科 准教授）

去る8月4日、夏らしい暑い日に、第4回フレンドシップ「あつまれ わんぱく隊」が開催され、約90名の学生と、地域の子どもたち66名がキャンパス内で元気に活動した。

第4回活動の主となる企画は民族資料博物館の見学と体験。学生たちは子どもたちに「世界の様々な国に様々な歴史と文化があって、その文化を直接見て、触れて、感じることで世界に興味を持ってほしい」との願いの基にこの企画を準備してきた。そして当日、現代教育学部70号館の前で、手作りの衣装を纏って海賊に扮し、迫真の演技と音楽で子ども達を仲間に誘い入れる。しかしそのためには、もっと世界をみんなに知ってもらいたいと語りかけ、世界の文化を見に民族資料博物館へという導入を行った。

「わんぱく隊」見学風景
真剣な眼差しで資料を見る子どもたち

民族資料博物館では、世界の国・地域ごとに博物館からお借りした衣装を纏った担当学生が子ども達を出迎え、貴重な資料を子どもたちに紹介すると共に、自分で調べたその国の挨拶や歴史、文化などを分かりやすく子どもたちに話していた。

一方子ども達は、珍しい楽器や衣装、生活用品を前に驚きや喜びを子どもらしく実に素直に表情に表わし、正に興味津々という様子であった。他では中々見ることも、まして触れることもできない貴重な民族資料博物館の収蔵物を真直に感じられたことは、きっと子ども達の貴重な生活経験となり、彼らの「人」を育む上で確かな糧になったと感じる。

また、こうしたことをきっかけに、学生たちが異国の文化について自ら調べ、体感したことで、学生自身が多くのことを学んだことも、保育士・教員養成という意味では実に大きかったと感じている。

（7ページへつづく）

実際学生の一人からは「この企画をするまで民族資料博物館の面白さが今一つ分からなかったが、今回自分で調べてから改めて見てみると、資料の背景にある色々なことが見えて面白かった。」という声が聞かれた。これこそが「本物」を収集・展示している博物館の魅力であり、それを学生と子ども達が共に学び合った今回の企画は実に有意義なものであった。（采睪）

「わんぱく隊」見学風景　迫真の演技で導入を行う学生

8月

■ 協力行事

「チャレンジドチルドレンのための小さな冒険プログラム 2013」

‖ 期間 ‖ 2013年8月29日（木）午後
‖ 会場 ‖ 民族資料博物館　夏季企画展示コーナー、多目的室

講師：中路純子（生命健康科学部 作業療法学科 准教授）

中部大学におけるこの活動も、今回で3年目を迎えた。

地域の小・中学校に在籍している発達障害のある子ども達が、社会生活を送るために必要なスキルを学ぶための一つの経験の場として、大学を利用している。

大学が地域の資源として地域住民に何らかの利益を提供し、学生の教育にも役に立つ活動の奨励は、文部科学省も行っており、中部大学もCOC（Center of community）として力を入れていることである。このプログラムに、昨年同様、民族資料博物館を冒険メニューの一つとして利用させていただいた。

昨年は思春期まっただ中の中・高生が中心であったが、今年は、小学生の主に低学年の子どもたちを対象とした。

昨年利用したときは、実際に触れることのできる体験が子どもたちにも好評であったので、今年もそれに重点を置いた。

作業療法学科の学生たちも学内の民族資料博物館に足を運ぶ事は日常ではなく、衣装の纏い方や楽器の触り方などの知識がないので、子どもたちにしっかりと伝えることが出来るように、民族資料博物館の利用準備班を作り、事前に使いたい衣装や楽器などを選び、纏い方・扱い方を教えていただくことで準備を行った。

実際の体験の場でどれだけの知識が子どもたちに伝わったのかは定かではないが、楽しい時間を過ごしたことには違いがない。

発達障害のある子ども達の最も課題となることは、人と同じ体験を共有することである。自分の思いを人に伝えることや人の思いを受け取ることが苦手である。

見たことはあるけど着たことのない民族衣装や、全く初めての衣装を身に纏う事は、何らかの情動を揺り動かす経験である。それを他者に向かって発信したり、同じような歓喜の声を出す友達を見たりして同様の興奮を感じ取ることは、非常に貴重な時間であったと思う。

来年以降もこのプログラムは続ける予定である。子どもたちが良い時間を過ごせるように私も努力を重ねたい。（中路）

2013 トピック

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

地域催事へ学生が参加
～古の染織材料（復元）をまとい舞台に

8月3日（土）午後、文化フォーラム春日井にて催された市制70周年記念市民協働事業の催事の一つ「古の技を現代につなぐ　春日井の彩り」において、染織衣料の復元や制作を行う市井のグループの方々による企画で、民族資料博物館は特別講演の企画協力に参加しました。講演当日は、想定復元された縄文衣や、中世から近代までの衣料を実際に人物が身につけながら紹介する時間があり、そのなかで本学学生がモデルとして参加しました。今回は衣料をきっかけとして、博物館における学習を、人間の実生活の風景に重ねて感じ取ることのできる時間となりました。

2013 下半期（秋季冬季）行事案内

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

◇秋季展示

素材研究展示～古典と現代の比較

顔料と染料における新たな日本画の表現

◇特別講演（連続２回）

素材研究～伝統文化を支える今日の材料

第１回：「箔の今日　～伝統工芸と食文化」
大平明子 氏（上智大学）／冨澤誠治 氏（株式会社 タジマ　主任）

第２回：「現代日本画の胡粉と顔料について～貝殻から生み出す白色の美」
中川晴雄 氏（ナカガワ胡粉絵具株式会社　代表取締役）

◇秋季連続講演（連続２回）

地域文化と民族資料―フィールドワークの現場から

第１回：「韓国農村の民俗文化―1970年代の映像で顧みる」
伊藤亜人 氏（東京大学名誉教授）

第２回：「パプアニューギニアの伝統と現在」
豊田由貴夫 氏（立教大学教授）